

## 矢西のイチゴのひみつを見つけよう

5月～1月(20時間)

### 1 ねらい

5月、学区のイチゴ農家、柴田さんのハウスでイチゴ摘みを体験した。柴田さんは、本学級のA児の祖母である。本校では、毎年3年生がイチゴについて学習するので、イチゴの収穫の時期の最後に声をかけてくださったのだ。「Aちゃんのおばあちゃんのいちご、真っ赤で甘いよ」「買って食べるイチゴと比べて、すごくおいしいよ」と嬉しそうにイチゴをほおぼる子どもたち。イチゴ摘みをきっかけに、「イチゴについて調べたいな」「どうしたら甘いイチゴがたくさんできるのかな」と、イチゴに対する興味がぐっと高まった。そこで、イチゴがおいしく順調に育つように季節によって様々な工夫をしているイチゴ農家の仕事について社会科と関連させて学び、自分たちの生活とのかかわりを考えることができるのではないかと考え、本単元を設定し、目指す子ども像を以下の通りとした。

イチゴ農家の思いに触れ、地域に生活する自分を見つめ直そうとする子

### 2 実践の概要

#### (1) イチゴを育てよう

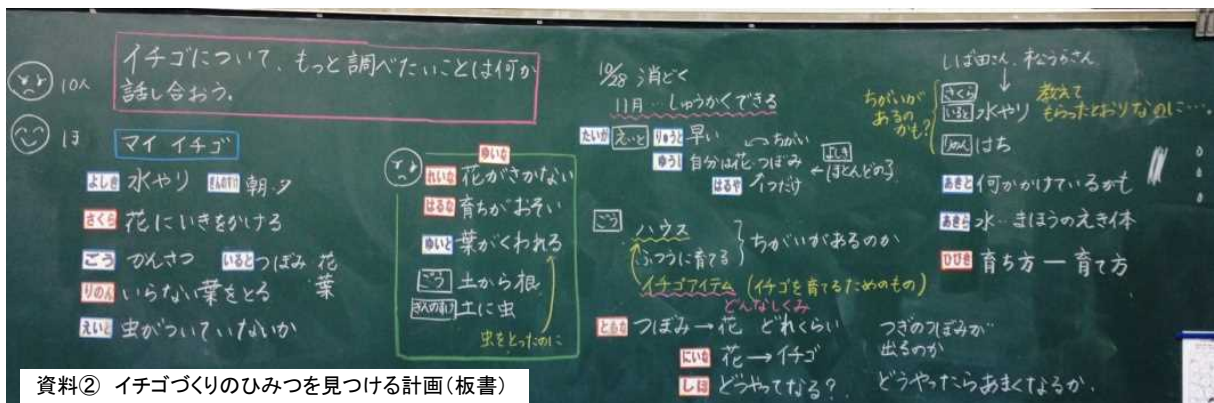
9月、柴田さんからイチゴの苗をいただき、一人一鉢育てることにした。当日は、柴田さんと、西三河農林水産事務所の松浦さんに来校していただき、害虫や病気が発生しないようにすることや水やりについて教えていただき、苗を植えた。子どもたちは、「柴田さんのような真っ赤でおいしいイチゴを育てたい」という気持ちを持って、毎日世話をした(資料①)。その後も何度か柴田さんが様子を見に来てくださり、「葉かき」を教えてくださいたり、「これが虫だよ」と害虫を教えてくださいたりした。水やりを忘れがちだった子も、すくすく育つ自分のイチゴを大切に思い、必ず水やりをするようになった。



資料① 自分のイチゴの世話

#### (2) 柴田さんのイチゴづくりの秘密を見つけよう

11月、多くの子のイチゴの花が咲いた。子どもたちに「イチゴの世話で困っていることはないかな」と尋ねてみた。すると、10人の子が「困っていることがある」と答えた。その内容は、「葉が食われている」「花が咲いている子が多いのに、自分のは咲かない」「育ち方が遅い」ということだっ



資料② イチゴづくりのひみつを見つける計画(板書)

た。いくつか困ったことが挙げられたが、ほとんどの子は「元気に育っていて、困っていることはないよ」と答えた。そこで、「柴田さんは、もうイチゴを出荷するみたいだよ」と伝え、「イチゴができるのが早い」「魔法の液体をかけているのかも」「柴田さんのハウスには、イチゴを育てるための『イチゴアイテム』があるのかも」など意見が出され、柴田さんのイチゴづくりの秘密を見つけるために、赤くなったイチゴがある柴田さんのイチゴハウスの見学に出かける計画を立てた(資料②)。

イチゴハウスの見学は、5月のイチゴ摘み、9月の植える前に続き、3回目になる。子どもたちは、イチゴの世話について柴田さんにたくさんのことを教えていただいているが、春のイチゴ摘みで好きなだけ食べることができたこともあり、柴田さんのイチゴが、パック詰めされスーパーで売られているイチゴになるということがイメージできていなかった。そこで、まずJAの集出荷場の見学を



資料③ 出荷の作業について説明を聞く  
(JAあいち三河 矢作農産物集出荷場)

行ってどのように出荷するのかを調べ(資料③)、きれいにパック詰めされたイチゴを買って1粒ずつ食べた(資料④)。子どもたちは、「すごく甘くておいしい」「上から下まで真っ赤だよ」と、少しずつ味わって食べた。また、集出荷場の見学から、「柴田さんは、1日に200パックも出荷していてすごい」「矢作のイチゴ農家みんな1200パックだよ」「出荷されるイチゴが全部きれいでおいしいなんてすごい」と意見が出されたので、「柴田さんのイチゴづくりの秘密を見つけよう」という課題をもってイチゴハウスの見学をすることにした(資料5)。



資料④ 買ったイチゴ  
「おいしいよ」

イチゴハウスでは、子どもたちは、温度を上げる仕組みや虫を取る紙、水やりや肥料など、それぞれの視点でイチゴづくりの秘密を見つけることができた。また、たくさんのイチゴを毎日収穫できる広いハウスを、柴田さんは1人で作業しているということに気付く子もいた。柴田さんへの質問の際には、「大変な仕事だけど、面倒だと思ったことはない。仕事は楽しい」「早く赤くすることはできない」「時間をかけて赤くなったイチゴほど甘い」など仕事に対する思いを聞くことができた。また、腐らないように、虫がつかないように気をつけているので、今は捨てるイチゴがほとんどないということも教えていただき、柴田さんのプロの技にみんな驚いていた。

ハウスの見学の後、柴田さんの自宅に「予冷庫」とパック詰めの様子を見に行くことができた。大きさと形で分けてパック詰めを行う様子がよく分かった。「これは75グラムぐらいだね」と、イチゴを持っただけで重さが分かる柴田さんの技に、子どもたちは感動していた。



資料⑤ イチゴハウスの見学

### 3 実践を振り返って

本校では毎年3年生がイチゴの学習を行い、一人一鉢イチゴを育てている。今年は繰り返しハウスを見せていただいたり育て方のアドバイスをしていただいたためか、水やりなどを面倒くさがらず、一人一人が一生懸命世話をしている。冬になった今も、長放課になると1番に水やりをしている。また、集出荷場やパック詰めの様子を見学したことによって、商品としてイチゴを出荷するために、農家の人たちがとてもたくさんの努力をしていることを実感することができた。